

タイにおける読解教材開発の指針 ——教材と授業の実態調査から見えるもの——

牛窪隆太・中津飛鳥・内畑愛美・武井啓子
秋田美帆・内田陽子・福池秋水・安田励子・中山英治

1. はじめに

タイ国内では、主に中等教育を対象として教材開発の研究が実施されてきた(Bussaba・今枝・Prapa(2005)、Prapa・八田(2006)、Prapa・三浦・渋谷(2010))。国際交流基金(2010)によれば、タイ国内の日本語学習者の増加は中等段階において顕著であるとされ、教材開発の研究が中等教育を対象として実施されている背景には、中等教育段階での学習者数の増加があると考えられる。一方で、高等教育以上の段階において使用される教材についての調査は、管見の限り見当たらない。国際交流基金(2010)は、高等教育段階は円熟期にあるとしているが、高等教育段階の特に中級以上では、タイで作成された教材はほとんどなく、日本で作成された教材のタイ語版や自作教材が使用される傾向があるという。中等教育で日本語を学習した学習者が高等教育段階へと移行することを考えれば、中級以上の学習者を対象としたタイ国内向けの教材開発が課題になることが予想される。以上の問題意識から、本稿では、特に読解教材に注目し、タイ国内の高等教育段階で使用されている教材の実態と教師の意識について実施したアンケート調査の結果を報告する。その上で、今後の読解教材開発の指針を探るための議論の中間報告を行なうことを目的とする。

2. アンケート調査内容と実施方法

本調査に先立ち、アンケート項目を選定するためパイロット調査を実施した。パイロット調査では、調査協力機関にEメールで読解授業や教材について問い合わせ、得られた回答の内容を検討し具体的項目を選定した。本調査は2011年12月から2012年1月の間に、Web上に公開されているアンケート作成ツール「アンケートツクレール⁽¹⁾」を使用して実施された。Webツールの使用により、遠隔地からの回答を容易にすると同時に、教育機関内での立場に拘らず、授業を担当する教師自身の声を拾い上げることを意図した。そのため、調査の結果は各機関の公式の見解ではなく、日本人タイ人教師を問わず、現場に携わる教師それぞれの声を反映したものであることを断っておきたい。アンケートの質問項目は、レベル別に以下のものを作成した。

問1. 調査協力の確認／問2. 機関名／問3. 読解授業の目的(選択)／問4. 読解授業の目的(その他・記述式)／問5. 教材選択の際に大切に考えていること(選択)／問6. 教材選択の際に大切に考えていること(その他・記述式)／問7. 使用教材名(選択)／問8. 使用教材名(その他・記述式)／問9. 使用教材の使いやすい点(記述式)／問10. 使用教材の使いにくい点(記述式)／問11. あったらいいと思

う教材(記述式)問 12. 授業に際して学生について気づいたこと(記述式)/問 13. 授業に際して教師として気を付けていること・コツ(記述式)

問 1 から 2 は、調査実施に関わるものである。問 3、5、7 はパイロット調査で得られた結果を検討することで主なものについて選択肢を作成し、それ以外の答えをそれぞれ問 4、6、8 の自由記述で得ることにした。問 5、6 が、教師が教材選択の際に着目する観点であるのに対し、問 9、10 は現在使用している教材についての評価である。読解教材についてだけではなく、読解教材を広く読解授業に位置づけるために、問 11 から 13 は教師の認識についての設問を作成した。問 11 は期待する教材像、問 12、13 は読解授業での学習者の様子や読解授業に臨む際の教師の心構えを問うものであり、教師が学習者についてどんなことに注目しているか、また何を重視して読解授業を行なっているかについて自由記述で回答を得ることにした。

3. 調査結果

調査の結果、10 機関から計 18 の回答を得た。内訳は、初級 10、中級 7、上級 1 である。上級についての回答が 1 機関からのみであるため、本稿では、初級、中級の調査結果を中心に報告する。以下、読解教材、読解授業の順に、調査結果をまとめながら見ていく。

読解教材⁽²⁾について、問 7、問 8 の回答をまとめたものが以下の表 1 である。

表 1. 使用読解教材一覧(アンケート問 7・8)

	教科書名	回答数
初級	初級で読めるトピック 25(スリーエーネットワーク)	6
	生教材	3
	自作教材	3
	楽しく読もう I (文化外国語専門学校)	2
	げんき(ジャパンタイムズ)	2
	みんなの日本語(スリーエーネットワーク)	2
中級	テーマ別中級から学ぶ日本語(研究社)	4
	レベル別日本語多読ライブラリーにほんごよむよむ文庫(アスク)	4
	生教材	4
	読むトレーニング基礎編(スリーエーネットワーク)	2
	完全マスター2 級日本語能力試験読解問題対策(スリーエーネットワーク)	2
	楽しく読もう I (文化外国語専門学校)	2
	日本語中級 J301(スリーエーネットワーク)	2
	日本語を楽しく読む本・中級(産能短期大学)	2
	中級へ行こう(スリーエーネットワーク)	2

使用されている読解教材をレベル別にみると、初級は、『初級で読めるトピック 25』など、幾つかの代表的な教材への傾向が見えるのに対し、中級以上は、特定の教材への傾向が存在せず、複数の教材を組み合わせ使用する場合、生教材を取り入れるケースが見られる。

では、教師はこれらの読解教材をどのような観点で選択しているのだろうか。次に、読解教材が選択される背景を見てみたい。問 5 の結果のうち上位 3 項目をまとめたものが表 2 である。

表2. 読解教材を選択する観点(アンケート問5)

	項目	回答数(割合)
初級	話題や内容が適切か	7(70%)
	レベルが適切か	7(70%)
	文法の解説や練習があるか	2(20%)
中級	話題や内容が適切か	7(100%)
	レベルが適切か	5(71.4%)
	文法の解説や練習があるか	3(42.9%)

初級中級共に「話題や内容が適切か」というものが挙げられ、本文の内容が重視されていることがわかる。一方で、「文法の解説や練習があるか」については、初級では20%(2/10)にとどまっているのに対し、中級では42.9%(3/7)と割合が高くなっている。初級では、文法項目は読解以前に学習されるものであり、読解教材の中では重要視されないのに対し、中級では、読解教材の中に文法練習が組み込まれていることが望ましく、それが教材選択の基準になるということである。

教師の読解教材についての評価観点を更に詳細に検討するため、問9、10の自由記述で得られた回答を見てみたい。問9は教材の使いやすさ、問10は使いにくさについてであるが、ここでは、問9、10の結果を統合し、教師の読解教材についての評価観点として示すことで、教師が教材の何を評価しているかについての傾向を提示する。教師の教材に対する評価観点を示すものとして、記述文中の共通する内容を文中に使用された用語に即してコードとして抽出した。問9、10の回答から抽出されたコード、言及した回答者数の上位3項目を表わしたものが以下である。

表3. 読解教材についての教師の評価観点(アンケート問9・10)

	コード	コードの指す内容	回答者数(割合)
初級	「本文の難易度」	本文の難しさについての言及	5(50%)
	「トピック・内容」	本文の内容についての言及	4(40%)
	「設問の数と質」	内容確認問題についての言及	4(40%)
	「授業準備」	事前準備の必要性についての言及	4(40%)
	「既習文法との整合性」	本文中の文法項目についての言及	3(30%)
中級	「トピック・内容」	本文の内容についての言及	4(57%)
	「活動の広がり」	読解後の展開のしやすさについての言及	3(43%)
	「読解技能の養成」	読解ストラテジーについての言及	2(29%)
	「本文の難易度」	本文の難しさについての言及	2(29%)

初級中級ともに「トピック・内容」が約半数の回答者に見られ、本文の内容が教師の教材評価の観点としても重要であることを示している。一方、初級では「設問の数と質」や「既習文法との整合性」についての回答が見られ、内容理解に重点を置いて教材評価がされるのに対し、中級では、「読解技能の養成」や「活動の広がり」など、読み方や読後の展開への配慮が評価されることがわかる。つまり教師は、初級では既習文法で理解できる内容を重視して教材の使いやすさを認識するが、中級では本文の内容からの展開に重点をおき、それを教材にも求めるのである。

それでは、初級、中級において、読解授業の目的はどのように認識されているのであろうか。問3の回答のうち上位3項目をまとめたものを以下に示す。

表4. 読解授業の目的(アンケート問3)

	項目	回答数(割合)
初級	既習文法の応用	7(70%)
	文化理解	7(70%)
	読解力の育成	6(60%)
	語彙習得	5(50%)
中級	読解力の育成	7(100%)
	多様な文章スタイルに触れる	4(57.1%)
	既習文法の応用	3(42.9%)
	語彙習得	3(42.9%)
	能力試験対策	3(42.9%)

表4を見ると、初級中級における読解授業の位置づけの差を顕著に確認できる。初級における読解の位置づけは、「読解力の育成」を抜いて、「既習文法の応用」という回答が多く(7/10)、文型定着を確認することが読解授業の目的であるという高い認識がうかがえる。一方、中級において、目的を「既習文法の応用」とする回答は半数以下(3/7)にとどまり、全員が、読解力の育成を読解授業の目的として認識している。つまり中級以降、読解授業の目的自体が文法項目の理解を超えた読解力の育成へと移行するのである。問5の回答に見られた、教師の文法項目に対する意識の違いや、問9、10で見られた中級教材に対する評価観点としての活動の展開の言及は、このような読解授業の目的の移行の中で生まれているものであろう。それでは、初級から中級への読解の移行は、読解授業にどのような影響を与え、授業の中でどのように消化されているのであろうか。

問12、13で得られた学生の反応、教師として心がけていることに記された自由記述の回答から、授業に対する教師の意識について見てみたい。それぞれの回答について、学生についての気付き、教師自身についての気付きから再分類し、表5、表6にまとめた。表中、イタリック体は読解力育成についてのもの、網掛けは、文法・語彙、漢字などの理解についてのものを表わす。

表5. 読解授業についての教師の意識(アンケート問13)

	回答
初級	【コツ】 読解を楽しめるように授業で習った読解力のテクニックを生かすこと 楽しめることで、読解力と日本語能力の向上につながる(→楽しませること) 時代背景を知るために類似した内容のもので映画化されているものをDVDで鑑賞してから文章に入る 学生に次の授業で読む文を先に読ませておく。授業がスムーズに進む 読む前に必要な(忘れていそうな)文法を確認・練習してから読解をするようにしていた 知らなさそうな語彙に意味付きのものを付けたり、覚えてほしい語彙には空欄にしたリストを付けておいてから、文章を読ませる
	【気を付けていること】 読む目的は何かを常に明確にして、教えている 伝える言葉一つひとつにも神経を使って授業をする ただ単純に「読む」作業で終わらないようにしている 学生がどれだけの「読解力」を持っているかを教師が把握する(それができているかどうか疑問) その文を読んでどう思ったか、どうしてそう思ったかを話し合う/少しずつ難しくする 勉強した文法に従って読解をする/時間制限を設けて、ダラダラ読まないようにする 黙々と読まず、読んだ感想や読解のトピックと関連することを話す活動を取り入れた あまり辞書に頼らないで読むことができるようにした
中級	【コツ】 学生が「読めた」「わかった」「だいたい把握できた」という満足感を持って、読める文章を数こなす まず、文章の構成をおさえてから、内容を理解させる。
	【気を付けていること】 文法の授業とどうすれば違った教え方になるか(を考える)

	学生の好む素材を選ぶ／知らないことば、読めない漢字があっても、読み飛ばす／学生がいかに自分と向き合っているか、読解教材といかに対話しているか(を見る)／自分のペースでゆっくり読めているか(を見る)
--	--

表5を見ると、読解を担当する教師が実に様々な工夫を持って授業に臨んでいることがわかる。初級で目に付くのは、文法や語彙の理解のための工夫と、読解力の育成のための工夫の両方がなされていることである。中級を見ると、文法や語彙の理解は、ある程度できればよく、読み飛ばさなければならぬものとして位置づけられている回答もある。つまり、初級では、教師は文法や語彙の確実な理解のための工夫をするのに対し、中級以降では、その部分は教師によっては提供されず、学習者自身で処理できるはずのものとして位置づけられる側面を持つものであると考えられる。このことは、次に示す学生についての教師の気付きにも現れているように思われる。

表6. 学生についての教師の気付き(アンケート問12)

	回答
初級	【得意なこと】 得意なことは漢字／選択問題だとよくできることが多い 【苦手なこと】 文中での動詞の活用／助詞の意味を正確に捉えない／受身文・使役文が出てくると二つを混乱させて誤って理解してしまう／勉強したばかりの文型で読解する／下手なことは文法／タイ語でできないことは日本語でもできない(例えばグラフの読みとりなど)／漢字を書くのが大変／習った漢字が文の中に出てきても読めないことが多い／読解力(=テクニク)が高くないと考える／集中して読むこと／読むことそのものが嫌い／行間を読むことが苦手／文を書かせたり言葉を抜き出したりして答える問題が苦手そう／学生の音読があまりうまくならない 【好きなこと】 活動につながるような題材のときには学生は楽しそうに取り組んでいた／読解でも活動を付けないといけません、リラクスのためのゲームも必要／ピアリーディングで読む作業を進めるのは楽しいようだ／発展させた質問や話題をふると興味を持って聞いてくれる／辞書を引いて新しい言葉の意味を知ること
中級	【得意なこと】・回答なし 【苦手なこと】 以前より読解力が落ちていくように感じる。タイ人の先生に聞くとタイ語の文章も理解できないようになっている。一言一句を理解しないとなかなか先に読み進めることができないので、読むスピードが遅い。／知らない単語があっても、読み飛ばせるようなスキルがない／想像力を使ったり、文の前後関係から語彙の意味を推測したりする力を使わないで読解しているように思う／速読によって全体を把握する力が不足している／基本的な漢字の意味を知らないため、大事なところが読み取れなかったという基本ミスが目立つ 【好きなこと】 ゲームのような活動があれば、学生が生き生きと勉強してくれる気がします／ジグソーリーディングをすると、満足感が得られるようだ／本文の内容をドラマのようにして演じるのが好きな学生もいる

表6は、問12(教師が読解授業において学生について気付いたこと)について得られた回答をまとめたものである。ここで注目したいのは、中級の読解授業で学生が苦手なこととして挙げられているものの中に、文法や語彙の確実な理解に対する固執が原因と思われるものが存在することである。初級の読解授業が文法の理解を目的に含んだ上で実施され、また教師からも確実な理解のための工夫が提供されているとすれば、読み飛ばすことや推測で読み進めることを学生に要求することはできない。しかしながら、中級において確実な理解に固執することは、読解の妨げとして位置づけられている。つまり、中級の授業で求められる読解力は、初級で目的とされるものとは異なるものであり、それが学生の苦手なこととして認識されていると考えられるのである。このことは、初級から中級へという移行がスムーズには実施されておらず、学習者は初級で身につけた読解の方法に固執したまま、中級の読解へと順応することが要求されることを示している。

4. まとめと今後の課題

アンケート調査で明らかになった、初級中級共に読解教材として生教材や自作教材が多く使用されているという実態は、市販の教材と現場の間に存在するギャップが、それぞれの読解授業を担当する各教師の工夫によって埋められているというタイ国内の現状を示していると考えられる。また、初級から中級へという読解授業の目的・内容の移行にスムーズに順応できていない学習者が存在する可能性は、今後、その移行を円滑に進めるための読解教材が求められることを意味しているといえる。問11「あったらいいと思う読解教材」の回答には本文のタイ語訳、学生が興味を持ちやすいトピック、タイのことと関連している教材等を求める声があがり、読解ストラテジーの練習ができる問題、選択形式ばかりでなく文で答える形式の問題の必要性も指摘されている。

これらを踏まえ、今後の指針として、1)タイの学習者に合わせたトピックを取り入れた教材、2)初級から中級への移行を対象とし、確実な文法理解から、より発展的な読解力の育成へ繋げるための教材の開発が必要であるとする。今回のアンケート調査では読解授業に携わる教師の意識などを詳細に把握することはできておらず、数の面でも限定的であることは否めない。今後、今回は詳しく取り上げることができなかった問11の回答の分析も含めて更に議論を進め、タイ国内の現場の声を反映させた読解教材の開発を進めたい。

注

(1) アンケートツクレール：<http://enq-maker.com/>

(2) 本調査は、「読解」科目に限らず、広く「読解を扱う授業」についての教師の考えを問うものであった。そのため、何を「読解教材」とするかは回答者の判断にゆだねた。

参考文献

- Bussaba Banchongmanee・今枝亜紀・Prapa Sangthongsuk(2005)「タイの中等教育用日本語教科書作成プロジェクト」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第2号、pp147-158
- Prapa Sangthongsuk・八田直美(2006)「中等教育用日本語教科書『あきこと友だち』教師アンケートの結果報告」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第3号、pp181-190
- Prapa Sangthongsuk・三浦多佳史・渋谷実希(2010)「中等教育機関の日本語選択コース教材作成にあたっての調査結果報告」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第7号、pp121-128
- 国際交流基金(2010)「日本語教育国別情報 2010 年度(タイ)」(取得日：2012年3月10日)
URL：<http://www.jpf.go.jp/japanese/survey/country/2010/thailand.html#JISSHI>

付記：アンケートにご協力くださいました各教育機関の回答者の先生方にこの場を借りて厚く感謝の意を申し上げます。